

9月の最初の土曜日、ゆきんこで毎年恒例で行っている人形劇団「とんと」さんの公演の日のことでした。玄関先で受付をしているあたりから、「あらーあー」と、すごい歓声。何かと玄関先をのぞくと、そこにはなつかし～いゆきんこOBの中村みきちゃんのお母さんの姿が！！…ということはその横にいるのは、…未樹ちゃん？！、うしろにいるのは、お父さん！！

あれ？たしか「とんと」さんの案内は小学生にしか出していないはずなのに、「とんと」さんを観に来てくれたの？？…、と頭の中できると考えていると、たまたま「とんと」さんの公演の日だったというだけで、実はゆきんこで今取り組んでいる増改築募金をわざわざ届けにきてくれたのでした。

今、未樹ちゃんは介護施設の中で働いていて、そのお給料の中から未樹ちゃんの募金と、弟の雄祐くんからの募金を頂きました。本当にありがたいなあと思います。

未樹ちゃんはゆきんこの第5回卒園生、今から15年前に卒園しました。障害を持った未樹ちゃんを地域のいろいろな子どもたち、人たちの関わりの中で育てようとお母さん、お父さんが考えて行動されてきたことを、折に触れ直接あるいは間接的に聞くことがこれまでありました。久しぶりに会った未樹ちゃんは、自分でバスで職場に通っていること、夏は暑くてたいへんだったこと、職場でがんばっていることをていねいに話してくれました。かわいいやさしい笑顔と表情は昔の小さい頃の未樹ちゃんでした。

中村さんにこれまでどんなふうにも未樹ちゃんのことを考えてみえたのか、あらためて教えてほしくて「どろんこと太陽」のこのコーナーに原稿をお願いしてみたら快く引き受けていただくことができました。(玉崎)



地域の中で共に子育て

中村小織

「ただいま～。今日もたっくんお仕事して喜ばれて楽しかったわ。」

汗だくの顔で帰ってきます。それも満面の笑みで…。それで母の心はふわっと癒されます。

知的障害を持って生まれた長女は今年22歳になります。ゆきんこを卒園してもう15年。早いなあ～、走馬灯のごとくとはほんとにこのことです。

ゆきんこの出会いは長男を出産する際に、長女をみてる人がいなかったから。祖父母たちはまだバリバリ働いていたので、出産して落ち着くまでの間、どうしようと思っていたら、当時、長女のリハビリの先生がいい保育園があるのよと得意そうに紹介してくださったのです。

まだ2歳だったから臨時入所でいいやなんて、そんな軽い気持ちからでした。ところがどっこい“ゆきんこ共同保育所”はすごかった。

なにがすごいかってあらゆる面で。保育、親のパワー、みんなで共に育てるから知らない父母がいない。それどころか祖父母まで仲良くなっちゃってる人もいて…。もちろん中村家も大歓迎されました。

この出会いを大切にしたいと思い、臨時入所後すぐに正式入所することに決めました。ところがです。

入所してしばらくたつと細菌やウイルスに対して抵抗力が乏しかったせいで一週間通っては一週間休むを何度となく繰り返しました。もう集団生活は無理かなとちょっぴりあきらめかけたとき、保育士さんが“続けること”を勧めてくださいました。

そしてひとつのいい方法をみつけたのです。それは午前中を集団で過ごし、午後からはおうちでゆったりするという“半日保育”。なんと一年半続けたら休む日もぐっと減り、一日保育に戻してもあまり病気をしないたくましい体になっていました。

こうしてこの他にいくつかあったハードルもゆきんこのみなさんの応援で乗り切り、無事、卒園に至りました。感無量でした。リズムもほんとに上手になっていましたから。

卒園後はでかぎんなんになったころ父母でよく話し合ってた決めていた養護学校に入学しました。でも養護学校って帰ってくるのがとても早いんです。2時半にはもうおうちに着いています。しかも放課

後、遊ぶ相手がいない。父と母は知恵を絞りました。もっと大きな集団で子どもたちを育てていきたい。ちょうど三人目がお腹にいたのでその思いはいつそうつのりました。

ある日、母が言いました。「家を建てたい。」父はそれを受け入れ大きな決断をします。場所は鯖江の一番小さな部落。これからはこの地域で子どもたちを育てていけると思うと胸がわくわくしました。

ゆきんことの別れに後ろ髪はひかれましたが、そこで学んだ“共に育てる”の精神を座右の銘とし、だれも知らない田舎で新しい生活がスタートしたのです。

この地域は幼稚園しかなく、だいたいのおうちが3歳までお母さんかおばあちゃんがみる“家守り”。小さな路地では子どもを遊ばせている姿があちこちで見られました。長男は中ぎんなん組でゆきんこを退所し、小学校併設の幼稚園に入園しました。2キロある道のりを幼稚園児も小学生もいっしょに集団登校で歩いて通います。長女を連れて小学校の門を叩き、校長先生や教頭先生に地域での子育ての想いを話し、この集団登校に長女も参加させてほしいとお願いして許可をいただきました。

それがきっかけで養護学校が休校の日には小学校の同じ学年の教室に招かれ、授業をいっしょに受け給食をいっしょに食べ楽しいひとときも体験させていただきました。放課後は近所の子どもたちが遊ぼうと誘ってくれたり、夏休みは毎年プールに参加させていただいて…。

そんなある日、長女は私も弟といっしょにこの小学校に通いたいと口にするようになりました。もうびっくり。

ちょうどその年に特殊学級ができたので思い切って夢への実現に動き出しました。

養護学校から特殊学級への転校は珍しかったので手続きがいっぱいありました。もう目がぐるぐる。手続きが何とか間に合い、6年生の一年間は地域の小学校に通い卒業証書を手にする事ができました。



こうして長女の存在を知らない人はほとんどいなくなり、父は壮年会とスポーツ少年団で地域の子どもたちと共に汗を流し、母は婦人会でかつてゆきんこで培った子育ての話に花を咲かせ、苗字ではなく名前呼び合うすっかりふつうの村人になりました。

時は目まぐるしく流れ、長女は校区外の中学校の特殊学級を経て、養護学校高等部を卒業し、鯖江に

ひとつしかない授産施設にコミバスで通うことになりました。しかし次第に元気がなくなっていった…。

合わないことはうすうす気づいていましたが我慢も必要と思っていました。なだめられて通った一年三ヶ月後、豪雨で自宅が床上浸水の被害を受け、父と母と長女はしばらく仕事を休みました。家の中は泥だらけでも地域の方々の温かさに心はありがたいの気持ちであふれ、家族は一致団結し、中でも長女ははりきって復旧作業を楽しんでいました。

けれどそれ以降、施設に通うのをしぶるようになってしまったのです。そして父と母はまた大きな決断をします。一年半で施設を辞め、長女を励まそうと父と共に母の勤めている保育園にボランティアとして参加してもらいました。生き生きしていた様子から人と触れ合う仕事が好きなのを知りました。

その後、日中一時支援で心身リフレッシュしていたころ、区民体育大会で今まで話をしたことの無いおじさんが最近、長女をコミバスの停留場で見かけないことを気にして声をかけてくださいました。

父と母はそれだけでほんとうにうれしかった。

事情を話すと老人と身障者のデイサービスでヘルパーの補助としてまずはボランティアで働いてみないかとお誘いのお言葉が…。夢のような話でした。一日2時間のボランティアから始まり、一年後には週4日の5時間労働でお給料をいただけるようになりました。

母がゆきんこの「ちいさな手」の文集に“将来、体の丈夫でない人や動かせない人のお世話をしてほしい”と書いたことが現実になるとはほんと不思議。

そんな姉と共に育った弟たちや地域の子どもたちの将来はどんなものになるのか!?. 反抗期だった長男は乗り越えた姉の姿を見たからか、自分の進むべき道を自分で決めました。

いつかこの地域に家を建て、姉といっしょに暮らすそうです。

ほんとかなあ～。で、それを聞いて野球命の次男は兄貴頼むぞって涼しげな顔。へっへっ彼らしい。

同窓会に長女を誘ってくれる親学級の子どもたち。この優しさには心から感謝。ずっとこの村でいるんな子どもたちの成長を見守りながらこれからも年を重ねていきたいと思っています。

さあ今日も玄関で声が響きます。

「ただいま～ 今日もたっくんお仕事して喜ばれて楽しかったわ。」

その笑顔で母の心はふわっと癒されるのでした。